ごまかすな

新採時の赴任校は、生徒の大半が大学進学を目指す高校であった。

そこで先ず求められたのは、生徒に、大学入試に対応できる学力を付けることであった。つまり、先生に教科指導力があるかどうかが問われた。自分の校務分掌の一つは、1年生の副担任で、主に1年生の授業に出ることとなったが、教科の方針として、3年生の授業には全員が関わることになっていた。与えられた教材は、大学の専門課程で使うのと同程度のものであった。

予習の段階では、これで十分だろうと思って授業を試みたが、生徒からは次々に質問や疑問が飛び出し、立ち往生。自信のないところは次回に答えることにして、職員室に戻った。

自席に座るや否や、年配のA先生がおいでになった。先生は、つい先程、私が授業で使ったのと同じ教材を手にとられていて、あるページを開きながら次のようにおっしゃった。

「先生、ここのところ終わられたけ。自分はこう思うんだけど、どうかね。」

そこは、先程、生徒に質問され、返答に窮した部分だった。

A先生に自分のとった処置をお話すると、

「ああ、よかった。なまじっか知ったかぶりをして間違った答えを言ってしまうと、生徒から信用されなくなるからね。」とおっしゃった。

それからは、「分からないところは、次回までに調べてくる。」を堂々と口にすることにした。A先生には、新採の私がつまずくと予想されるところが、見えていたのではないかと思っている。